

珍しい時計のいろいろ

佛國パリに、近頃、物言ふ時計が出来た。從來、パリでは人々が天文臺に電話をかけて“今、何時ですか？”といふ風に聞く習慣があつたが、近年此の種の聞き合はせが非常に多くなつて、とても一々答へきれなくなつたので、國立天文臺長 Esclangon 博士はトキの原理を應用する考案をし、先づ一旦時計面を寫眞に撮り、其れを光電池で電流に變じ、一般の社會人からの電話がかゝつて來ると、すぐに其の時刻を“何時何分何秒”といふ風に答へることとした。尤も之れがため、天文臺内に特別な電話番號が定められることになつた。そして、多數の人が同時に各所から問ひ合はせて來ても皆に答へ得る由である。

パリでは之れに似た装置が以前から電話局にあつて、電話番號の變つた人々が呼ばれた場合に“番號は變りました。改めて局へ御聞き下さい”と器械的に答へさせてゐる。此の器械的答辯が本統の人の肉聲に非常によく似てゐるので何も知らない人が、時々此の器械的答辯に對して堂々と議論する人がある。しかし器械は何時までも單調に御答へを繰り返すのみである。

チエコスロバキヤ國カールスバード市の技師 Türmer は現代の時計が甚だ不便不合理なもので、之れはかの400年前コペルニクが天動説から地動説に宇宙論を改めた時に、時計の構造を改めることを忘れたためであるとし、種々新しい考案をし、遂に地球上の何所で、今、何時であるかを一見して知り得る時計を作つた。其の主要點は、時計の文字板を2つ置き、其の一は普通の時計の針の逆に(即ち、西から東へ、地球の自轉と同様に)回轉するもので、之れには世界の主な地名を畫き、他の一は固定してゐるが、0時から24時までを普通の時計の逆に目盛りしてある。

カナダのモントリオール市に、近頃、世界最大の時計が作られた。之れは、文字盤の面積が、ロンドンの有名な Big Ben の7倍もあるといふもので、或る醸造所の高さ60呎の鋼塔の上に据えられてゐる。此の時計は、夜はネオンサインによつて10哩の遠方からでも見える。文字盤は三方にあつて、直徑は60呎あり、機械部は約6トンあり、之れの据え付けのために、鐵管を9000呎、其の他に尙ほ何トンといふ鐵材を使用した。文字盤上に於いて、一分毎のしるしの

間隔は3.14呎あり、時間のしるしの間隔は15呎ある。又、分針の長さは30呎で、重さは2500ポンドある。又、時針の長さは20呎である。

イタリアの國、シチリヤ島のメスシナ市で近頃作られた大きい時計は、高さ12呎もある青銅製の獅子像が、毎日、正午には吠えるやうに作られ、又、高さ6尺の雄鶏が毎日の日出や日没の時には時を告げるやうにもなつてゐる。

英國では、大陸追放の刑期を終了した一囚人が完成した珍しい時計がある。之れは、どんな細かい部分品までも悉く木で作られ、尙ほ此の中には30ヶの異つた小時計があつて、世界の有名な各都市の時刻を示してゐる。尙ほ、そのほか、月と週と日附とを表はす指針も附屬してゐる。

數年前、スイスの一技師が不思議な時計を作つた。其の中には氣壓計が入れてあつて、日々の氣壓の變化が此の氣壓計を通じて動力に變へられ、時計が動くことになつてゐるのである。

英國グロウスタシャイヤ Gloucestershire のタリー Tirley 村の教會に据え付けられた時計は、歐洲大戰に没した一將校の記念品であつて、ジョン・カーター John Carter といふ車大工の作であるが、材料として、鋤や、金鹽や、巻揚げ機や、その他、いろいろの農具のこはれた古鐵を用ゐ、重量巻きのために、鎌を用ゐてゐる。此の時計は良く運轉してゐるといふ。

チエコ國のボヘミヤ州にはガラス製の珍しい時計がある。作つたのはヨゼフ・タイヤ Joseph Thayer といふガラス工で、幾年もかゝつて、どんな細かい部分までも、悉くガラスで作つたものである。

昔しの時計には、往々、面白い藝當を演ずるのがある。ドイツ國ステッテン市にあるのは、文字板の中央に、髯面の大きい人顔があつて、一秒毎に、眼の玉が左右に動き、日には其の月日を告げる金板がある。此の時計には1736年製といふ銘が入つてゐる。

又、スイスで、何百年か前に作られた時計は、通りかゝる人を呼び止めて、時刻を告げる。

英京ロンドンには、五錢の白銅貨よりも小さい時計があつて、今より100年も前に作られた8日巻き時計であるが、時計商組合の寶物となつてゐる。

前の英國王ジョージ陛下は殆んど1000ヶの時計を有つてゐられ、世界の時計

蒐集家の一人であつた。王の御所有の時計は、キンゾア宮城の至る所に置かれ、ボキンガム宮殿だけでも160個あつた。

ブレケ Brequet の“同情時計” Sympathetic clock といふのがボキンガム宮殿にあるが、之れは、さきの英國王ジョージ四世陛下が高い價を拂はれたものである。其の文字盤は黄金製で、鎖と鍵も附いてゐる。又、12時が鳴ると、鐵の針が動いて、分針が自然に正しく修正されるやうになつてゐる。

キンゾア宮城には、100年以上も動き續けてゐる驚くべき時計がある。英國々會議事堂の、かの Big Ben の如く、毎日僅々一秒の何分の一しか狂はない。之れは宮城の大四角堂の入口の上に置かれてあつて、風向きさへ良ければ、3哩も離れた遠方まで其の時鐘は聞える。

しかし、之れも、同じ英國サリスベリ寺院の塔上にある最古の時計に比べると、赤ん坊にも等しいものである。古記録によれば、此の時計は1386年に既に存在してゐたもので、1884年まで動き續けたレコードの保有者である。

昔し、水の流れによつて時刻を測つた例は多い。即ち、水時計といふものは昔しは世界到る所にあつたものである。中には簡單なものもあつたが、又、一方には非常に精細で、複雑なものもあつた。水時計の缺點は、水圧が減すると、水の流れも緩やかとなることである。昔しのギリシヤや、ロマでは、一時間といふものは、晝間は晝間で12等分し、夜間は又夜間で12等分したがため、一年中に絶えず其の長さが變るものであつた。それで、時計も常に之れのために修正する必要があつた。

エジプトのアレキサンドリヤの時計師等は、此の面倒な修正をすため、いろいろ工夫をこらした。中にも、クテシビウス Ctesibius といふ人が、アルシノク Arcinoc の寺院に置いた時計が有名である。之れは一日24時間の毎時間に、羽を有つた小兒が、手に棒を持つて柱の上へ登つて行き、そこに刻んである時を示すのであるが、一日の終りになると下底へ墜落して、又、前と同様にやり出す。此うした運動の動力は、今一人の羽のある小兒が、絶えず泣き續けて、流す涙によつて與へられるのである。

エジプトの或る寺には牛乳時計といふのがあつた。

僧院などには臘燭時計といふのがあつたことは衆知のことである。